

# 常光寺々報

2022.6

## 孟蘭盆会 文化法要

七月十六日（土）

朝十時半～十二時

昼一時半～三時

おてらしばい

午前 金子みすゞ いのちへのまなざし

～詩と歌と物語～

午後 愛しき娘 みすゞ

～いのち繋がる物語～

演者 なごみ庵 保谷果菜子

空気循環のため、本堂は扉を開けて、換気をしています。気候に合った装いでお参りください。

お経本とお念珠をお持ちください。マスクの着用もお願いいたします。

今回の孟蘭盆会法要は文化法要として、「金子みすゞ」のお芝居の観劇をおこないます。

その詩は小学校の国語の教科書に採用されることもあるように、小さいのちを慈しむ思いにあふれた詩ですが、仏さまの目を通してみると、人が見ないようにしていることも、見過ごしていることも気づかせ教えてくれる詩です。流行り廃りではなく永く人の心に残り、何より人の愚かさを伝えてくれます。

演じていただくのは、横浜にある「慈陽院 なごみ庵」という令和に新設された浄土真宗のお寺の坊守さんで、舞台女優をされていた方です。午前は金子みすゞさんの視点、午後はそのお母さんの視点のお芝居となります。

## 孟蘭盆会

日本では七世紀頃から宮中行事として孟蘭盆会が始まったようで、その様子が「日本書紀」に記されているそうです。

安居（雨期の勉強会）の最後の日に全ての比丘に食べ物を施せば、亡き母親にもその施しの一端が口に入ると説かれたお経の一説からくるものでしょう、お盆でお供えした食べ物や果物などを親戚や近所に配ったり、届けたりした風習が、「お中元」のものになったともいわれます。

宗派を問わず日本人の中に根付いた習俗とも言えますが、亡き方から、仏さまと向き合い手を合わさせていただくご縁を与えていただいたのですから、改めてその不思議のご縁を有り難く思い、お念仏させていたいただきたいものです。

## 毒箭のたとえ

マールンクヤプトラという弟子が釈尊に対して、「世界は未来永劫に存在するのでしょうか」「世界には果てがあるのでしょうか」「如来は死後も存在するのでしょうか」などの疑問をなげかけました。

そして、これらの問いに答えてくれないならば、自分は還俗しますといたしました。

これに対して、釈尊は次のようにお答えになります。

「あなたの疑問に対する答えを求めらるるのであれば、あなたはその答えを得る前に命が尽きてしまうでしょう。たとえば、ある人が毒矢で射られたので、みんなが心配して急いで医者を呼んできて、医者がまず矢を抜こうとしたら、その男が叫んだ。『この矢はどういう人が射たのか、

どんな氏名の人か、背の高い人か低い人か、町の人か村の人か、これらのことがわかるまではこの矢を抜いてはならない。私はまずそれを知りたい』というのならば、その男の命はなくなってしまうでしょう。あなたの問いはそれと同じなのです。もし世界は永遠に存在するとかしないとか答えることができる人がいたとしても、その人にも生老病死の苦しみがあり、さまざまな憂いや悩みがあるのです。あなたの問いは、人間の本当の苦しみや悩みとは関係のないことです。

わたしは説くべきことのみを説きます」

### 【解説】



私たちが本当に問題としなければならぬことを後回しにして、他の問題に目を向けていることを戒め、

何が最も大切かを示しています。

私たち人間にとって本当の苦は、生老病死です。それを乗り越えることが仏教の目的です。

これを親鸞聖人は「生死いづべき道」といいました。

蓮如上人も、後生の一大事をころにかけなさいとおっしゃられています。

ところが、私たちは、日常において、つい自分の死をどこかに追いつて生活しがちです。

私たちは、阿弥陀さまのお心を知らずに、逃げ回ってばかりいるのです。

そうやって真実から背いて生きていく私たちのような凡夫を追いかけて、摂め取り、決して捨てることのない存在が、阿弥陀如来といわれるのです。「本願寺教学研究所HPより」